

「モノ・コトの境界」

「一食は肉にするか魚にするか」という考え方も立派な分類だ。ついでに、いつも食べる焼き魚の身も立派な「肉」ともいえる。このように人間は普段から分類行為を行っており、それは分類されるモノ＝「種」に特別な性質が宿っているわけではなく、むしろ人間の認識の問題であるというのが本書の粗筋である。

もともと「分類」というものは生物学の分野でよく使われており、本書でも生物分類に関する論争の歴史を取り上げることで、分類行為がいかに関係が大きいかを解き明かしている。筆者も述べるように、世界のあらゆるものは緩やかに関係を持っている。それを無理やり切り離すところに分類行為そのものが抱える原罪の問題があるというわけだ。とはいえ「すべてのもの」を個別に理解できるほど世界は単純にできていないからこそ、この矛盾を抱えながらも人間は事物を分類せざるを得ない。

興味深いのは、ヒトは「分類されるべき性質をもった“種”というものはもともと存在する」と考えてしまう、「心理的本質主義者」とであると述べている点である。少なくとも昔、ヒトがまだあまり世界の事物を知らなかった時代は特にそうだったという。本書で紹介されている、部分から全体を想像する「メトミニー(換喩)」という思考法は正にヒトの性質をうまくとらえているといえる。「A 政治家が汚職事件を起こした、だから政治家という人種は不正をする悪い奴だ」というのも例としては良くないが、本質主義的思考の現れではないだろうか。この点に関しては2つの両極端な議論、つまりあらゆる事物には原初的な完全無欠の状態が存在するという考えと、常に変化し続けて決して同じにはならないという主張とがある。これは2000年以上前から議論が繰り返され、今なお決着がつかない。

近年になって後者の考えも勢力を伸ばしてきたが、これにも欠点があった。つまり常に細胞変化する人体を持つ人間は、一年前と今では全く別物になっていると言わざるを得ない。筆者は「時空ワーム」の概念を紹介して一つの結論を提示している。これは時間軸に沿って変化する「種」であり、ある時間で切り取った断面が「今」の状態になるというものだ。

「分類行為は認識の問題である」という言い方は正確でないかもしれない。むしろ筆者は、分類する者の人となりやバックグラウンドに焦点を当ててみようと言っている。それと同じで、複数の事物が「同じだ」と断言するのでも「別物だ」と切り捨てるのでもなく、「似ている」「なんとなく」というような、ヒト同士の共通認識や許容範囲を共有していくことで分類をしていく方法もあるのではないか。世界が狭まって多大な事物を知ることができるようになった現代にはそういうやり方が相応しいようにも思える。